

『延喜御集』についての研究

小林 美陽

一 はじめに

宮内庁書陵部には、奈良、平安初期の天皇の御製を収めた貴重な三部の御集が存在する。その一つは「奈良御集」と外題された奈良・光孝・宇多、三代の天皇の御製を集めたものであり、一つは「亭子院御集」との外題を持つ宇多天皇単独の御集である。そして最後の一つは「代々御集」と外題され奈良・光孝・宇多・醍醐・朱雀・村上・冷泉・円融八代の御製を集成、合綴したものである。これら三部は、いずれも靈元天皇宸筆の外題を持ち、近世初期の書写本である。

三部全てに共通して存在する宇多天皇の御集を比較してみると、書体、歌数、集付けの有無など、それぞれ小異が見られるが歌序や語句はほぼ同じであり、橋本不美男氏は同系統本とされている。また、『代々御集』について橋本氏は、奈良御集本、亭子院御集本それぞれの特有歌を持ち、

「不審」等の注記が付けられていることなどから、二つの「御集をあわせた校訂本」であり「ある時点における研究本文であろう」と述べられている。

本稿においては、『代々御集』に所収されている『延喜御集』を取り上げ、その構成、性質、編纂時期について他の天皇の御集との比較を交えながら考察を進めていくことにする。

二 『延喜御集』について

(一) 『延喜御集』の構成

『代々御集』（宮内庁書陵部蔵）に所収されている『延喜御集』は、醍醐天皇の御集として現存する唯一の孤本である。内容は和歌三六首、連歌二句で贈答歌が多く、過半数の歌が他人詠となっており、

① 醍醐天皇と後宮の女性および近臣達の贈答

(1 番歌 ~ 24 番歌)

② 前坊保明親王の周辺の贈答 (25 ~ 29)

③ 醍醐天皇讓位の後、朱雀院関連の歌 (30 ~ 37)

※ 歌番号は『私家集大成 中古 I』に従う

のように、三つの歌群から構成されていると思われる。③の歌群には朱雀院の御製が数首見られ、三四、三六はそれぞれ朱雀院御集 14、11 番歌と重複している。これについては久曾神昇氏が

(前略) 御讓位の時の御製の次にある数首は寧ろ朱雀天皇御集に収めらるべき性質のものと思はれるが、朱雀天皇の御事を、「此御門は女の御たけになさけなく南おはしける」と述べてあるあたりは、やはり巻頭に對應する詞と思はれ、殊にその中途にも醍醐天皇御製もあるので、この部分も元來醍醐天皇御集の一部であったのであらう。(『八代列聖御集』解題)

と述べられているのに従いたい。すなわち、32以降の朱雀院の御製やその関連の歌は、朱雀院御集から混入してきたものではなく、『延喜御集』の編纂者が集の一部として詞

書をつけて収めた歌なのである。

(二) 『延喜御集』所収の和歌

『延喜御集』に所収されている歌の作者を全てあげると次の通りである。

○ 醍醐宮廷

醍醐天皇	1	3	5	7	9	11	15	17	22	24	25	35
大宮 (隠子)	6	28										
三条右大臣女御	4	30										
承香殿女御	21											
中將更衣	10	(12)	13									
みやすどころ	2											
よしありときこしめす人	23											
伊衡中将	8											
おとど	31	連歌										

○朱雀宮廷

朱雀天皇	34 36 37
本院女御（清慎公戀）	32
その宮（清慎公）	33

○女房、蔵人

大輔	26 27 29
一条	14
女房	31 連歌
蔵人	16 18

以上のように、『延喜御集』に収められている三六首二句中、醍醐天皇の御製は一二首を数えるのみ、その他二四首二句の歌が天皇以外の人物によって詠まれているのである。

三 醍醐天皇とその周辺の人物

(一) 醍醐天皇の生涯

第六十代醍醐天皇は仁和元年（八八五）正月十八日、宇

多天皇の第一皇子として誕生する。母は、当時更衣であった内大臣藤原高藤の娘、贈皇太后胤子。諱は維城、のちに敦仁と改名する。寛平元年（八八九）十二月二十八日親王宣下あり、同五年四月二日立太子。同八年六月、母胤子が卒す。同九年七月三日、十三歳で清涼殿にて元服。同日宇多天皇の讓位で踐祚、同十三日大極殿において即位する。宇多上皇より讓位の際に与えられた『寛平遺戒』に従い左大將時平、大納言道真を併用し、時平は左大臣、道真是右大臣に進んだ。また、上皇自らも国政についての指示をしばしば与え、少年天皇を強く後見したのであった。しかし、『神皇正統記』等に見られるように左大臣時平の讒言によって、延喜元年（九〇二）右大臣道真是大宰権帥に左遷され、その後は時平一人が天皇を補佐し政權を握った。延喜九年に時平が没したのちは弟忠平が政權を継承して左大臣に進み、醍醐天皇の女御となっていた妹穩子もこれに協力した。

なお、延喜三年に誕生した保明親王（母皇后穩子）を同四年（九〇四）皇太子に立てるが、延喜二十三年三月二十一日、二十一歳で薨御する（諡文彦太子）。『日本紀略』には東宮の死を菅公の怨靈によるものとする記述が見える。その後保明親王の王子慶頼王を皇太子としたが、これも延長三年六月に薨御してしまつたため、延長元年七月に誕生していた寛明親王（朱雀天皇、母皇后穩子）を同三年十月

皇太子に立てた。その後天皇は延長八年（九三〇）病床上に臥し、九月二十二日大漸に及んで位を朱雀天皇に譲った。二十九日に落飾して金剛宝と称し、同日四十六歳で崩御した。陵は、京都府宇治郡醍醐村大字醍醐にあり、後山科陵と呼ばれる。遺詔により諡せず、醍醐天皇・小野帝などと称する。

（二）醍醐天皇の後宮

醍醐後宮は二十人を超える女御・更衣で構成され、その御子は『本朝皇胤紹運録』によれば三十六人に及んだという。後宮の主な女性には皇后藤原穩子、女御藤原能子、更衣源周子、中将更衣らがいる。

五条后と称された藤原穩子は仁和元年、太政大臣藤原基經とその室仁明天皇皇子彈正尹人康親王娘との間に生まれ、同母兄に時平・仲平・忠平、異母姉に醍醐天皇の養母、皇太夫人温子らがあった。醍醐天皇の即位とともに、基經の遺志に従い入内を希望したが、宇多天皇母后班子女王の命によってそれを阻まれる。しかし、基經の跡を継いだ兄時平が謀をめぐらし、ついに穩子の入内を強行して延喜元年に女御となつたのであつた。入内の障害となつた班子女王が崩御した後は、異母姉温子の擁護を受け、穩子は皇太子

保明親王を生むが親王は二十一歳で薨御。延長元年四月皇后となり、同年七月寛明親王（朱雀天皇）を兄右大臣忠平の五条第において出産する。次いで延長四年六月成明親王（村上天皇）を生み国母としての地位を確立し、時平・忠平らの妹、実頼・師輔らの叔母として藤原氏の勢力の拡大に協力した。朱雀天皇が即位した承平元年に皇太后へ進んだ穩子は、宮廷全体に対して強い影響力を持つていたようである。それは『大鏡』第六卷に、朱雀天皇が穩子のもとに行幸した際、穩子が申し上げた「いまは東宮ぞかくてみきこえまほしき」との言葉によつて天皇が讓位を行つたとする記述にも明らかである。天曆八年正月昭陽舎において七十歳で崩御した。

藤原能子の父藤原定方は高藤の子であり醍醐天皇の母胤子とは同腹の兄妹、三条右大臣と称された。初め更衣として入内した能子は延喜十三年女御となり、のちに三条右大臣女御と呼ばれた。醍醐天皇が崩じた後は敦実親王（醍醐天皇の同母弟）に嫁し、さらにその後、藤原実頼の室となつた。『大和物語』には、それらの折の能子の歌が見られる。源周子は源唱の娘。近江更衣と呼ばれ、『後撰集』などにその歌が見られる。更衣ではあつたが源高明、兵部卿時明親王、盛明親王、勤子内親王、都子内親王、齋宮雅子内親王、源兼子など、多くの御子を生んでおり醍醐天皇の寵

愛が深かったことが知られる。

中将更衣の父参議藤原伊衡は醍醐天皇の近臣であり、寛明親王（朱雀天皇）立坊後は東宮亮を務めた。「大鏡」などには成明親王の誕生を祝う、天皇との贈答歌が見られる。源為明を生んだ中将更衣の歌は『後撰集』以下の勅撰集に入集している。

その他にも後宮には承香殿女御（光孝天皇皇女源和子）、堤中納言の御息所（藤原兼輔娘桑子）らがいいた。

四 先行研究

（一）橋本不美男氏の御研究

橋本不美男氏は『桂宮本叢書』第二十巻解題（養徳社・昭36）、「私家集大成」中古1解題（明治書院・昭48）において『延喜御集』の組織について「この集は醍醐天皇関係の贈答をほぼ年代順にまとめたもの」とされている。集全体については以下のように述べられている。

本集の成立は相当古い頃と推定される。恐らく、天皇周辺の贈答歌を中心として編成されたものであるうか。

また、本集の現状、また古筆切の存在からして、伝存途中に、ある程度の欠落が生じたものと思われる。

また、清輔本古今集の頭注、袋草紙に引用された延喜御歌について指摘され（後述の久曾神氏の研究に詳しい）、さらに

御物御手鑑のなかにも「延喜御歌」として、伝頭昭筆古筆切、

しくれつゝかれゆくのへのはなゝれは

しものまかきにゝほふいろかな

延喜十四年尚侍藤原満子に菊宴たまはせる時

の一葉が採録され、この歌は花鳥余情巻二七（寄生）に「延喜御集」として引用されたものと同歌であることがわかる

とされている。

（二）久曾神昇氏の御研究

久曾神昇氏編著『八代列聖御集』（文明社・昭15）の解題において『延喜御集』の成立時期について

（前略）古今集巻十一「題しらず 読人しらず」の中にある「おもふにはしのぶることぞ……」の歌に雅經

眞蹟本には「在醍醐御集」とあり、又清輔本頭注に、

此歌在醍醐御集、詞云、だいこのみかどまだくらるにおはしましける時、御めのとこのせじのきみにいろゆるさせ給とて

とあるが、御集を見ると、

醍醐のみかどまだくらるにおはしましける時、

御めのとこの宣旨君に色ゆるさせたまふとて

思ふにはしのぶることぞまけにける

色にはいでじとおもひし物を

とあり、両者の合致することが知られる。清輔本の頭注は俊成筆御家切古今集と全く合致するのであり、その頭注は清輔本の祖本に既に存したのではないかと考へられるが、このあたり御家切がなく確かめられない。奥書によつて清輔が書加へたものも相当あらうと思はれ、假にこの書入がその時のものとしても清輔時代まで遡り得るわけである。此の如くして平安時代後期に存在した御集と現存御集と近い関係にあることが知られるのである。

と、貴重な指摘をされている。この他に久曾神氏が御集と『大鏡』の関連について述べられていることも含めて、『延喜御集』が少なくとも清輔の時代には存在していた確

率は高いと思われる。

また、前掲書にて氏は『延喜御集』の歌の脱落の可能性が注目され、以下のように述べられている。

(前略) 現存本は原本の全部ではあるまいと思ふ。脱落の存するらしいことは、勅撰集所載の三十六首のな
いことから考へられる(中略) 現存本には可なりの脱落があるのであり、完本とは言へないのであるが、諸集から御製を集録したものでないことは勿論である。

久曾神氏は、醍醐天皇の御製を網羅した完本の存在を示唆されているが、『延喜御集』の現存本は、作者・年代順に歌が配列され、詞書および左注的文章も連続していて大きな脱落があったとは考えにくい。確かに、御集の一一番歌と一二番歌の間には詞書に対応する歌が欠け、二行程度の余白が生じている。本来ここにどれだけの歌や詞書が存在していたのか知り得る手立てはないが、私には大量の脱落が発生したとは思えないのである。残された詞書に御息所(中将更衣と思われる)が長谷寺参りに出かけたとの記述が見え、一二番歌に長谷に程近い「みわのやま」という詞が詠まれていることから、ここには一二に対応する贈歌が脱落しているだけではないかと推測するが、詳細は不明で

ある。いずれにしろ私は、現存本『延喜御集』の性質から、脱落は一、二首程度であったと考える。それについては、御集に所載されていない御製についての考察とともに、次章において述べることにする。

五 勅撰集における醍醐天皇の御製

勅撰集において見うけられる醍醐天皇の御製は四二首程である。そのうち、『延喜御集』に見られる七首を除く、三五首もの御製が勅撰集に存在していながら『御集』に所収されていないのである。同様に、『代々御集』に御集が合綴されている他の天皇についても、勅撰集において御集に見られない御製を全て挙げると、光孝天皇が一首、宇多天皇が四首、村上天皇が九首、円融院が三首であり、朱雀院、冷泉院については全く見あたらない。(「ならのみかど」については、どの天皇であるのか判断としないため調査外とした)。以上の結果から、醍醐天皇の御製が群を抜いて多いことが分かる。その三五首の御製を、贈答の相手や詠歌時の状況によって分類すると次のようになる。

詠歌の状況	歌数
更衣との贈答	9
中宮・女御との贈答	3
父帝との贈答	1
歌合・物合・宴	8
その他	7
不明	7

このように、更衣との贈答、及び歌合や宴などで詠まれた歌が多くを占めている。一方、『延喜御集』を見ると、更衣との贈答は中将の更衣の数首が存在するのみ、歌合などでの御製は全く見あたらない。中将の更衣は醍醐天皇の近臣であり御集にも登場する、藤原伊衡の娘であるから特別な例と考えると、次の二点が看取できる。まず一点は、御集に集められている歌の大部分が醍醐天皇と女御以上の身分のごく身近な女性や近臣、乳母、蔵人たちの贈答ということである。そして、それらは歌合や宴のように大勢の人々が集まる場で詠まれた歌ではなく、天皇の身边で個人的に詠みかわされた歌ばかりなのである。

もう一つは、多くの御製が存在しているにもかかわらず、『延喜御集』に所収されている歌の過半数が他人詠である

ことから、この御集は醍醐天皇の御製を網羅し、記録することだけを目的として編纂されたのではないということである。特にこの点は、『代々御集』に存在する他の天皇の御集と比較してみると、『延喜御集』だけがもつ特徴であることがよく分かる。他の御集では、天皇との贈答における他人詠の歌は見る事ができるが、天皇以外の人同士の贈答歌は全く見られないのである。

こうした結果から、私は、『延喜御集』が『代々御集』の他の集とは一線を画するものであると考えるに至った。之を踏まえて次の段階では、『延喜御集』の性格について集の内容から考えてみよう。

六 『延喜御集』の性格

(一) 序文的な要素を持つ冒頭部分

『延喜御集』の冒頭には

御門におはしましけるなかに、たいこときこえさせ給けるぞ、なまめかしき御門におはしましければ、よきむすめもちたまへる人は、思きしろひ、みやすところあまたなりたまひにける中に、ときにもものし給ける、ほ御いとまをたゝ一二日ときこえてまかて給にける、ほ

とへければ、御文に

との、まるで物語の序文のような詞書がある。醍醐天皇に関する人物叙述から始まるこの一文は、まず「御門におはしましける」と御集の主の身分を明らかにし、次にその名前を挙げ、続いて「なまめかしき御門」であると醍醐天皇と後宮の様子についても言及している。この詞書を『代々御集』中の他集の冒頭の詞書(表1)と比較すると、非常に異なる性格のものであることが明確になる。

表1

『奈良御門御集』	詞書なし
『仁和御集』	まらみこにおはしましけるに、わかな人にたまふとて
『亨子院御集』	ねのひしに船岡におはしまししたりけるに、其次にとて、雲林院におはしますへしとありけるに、さもあらざりければ、遍昭か子のいうせい僧都の殿上人の中にきこえたりける
『朱雀院御集』	正月初子日東宮といとみて、おほんわりこてうせさせ給うて、中宮にまいらせたまふとて書つめさせ給ける

『村上御集』	天歷元年七月七日、うへのをのこともた、歌よませさせ給ける次に
『冷泉院御集』	また春宮と申し時、大宮の姫君と申しに、まいり給へる又の日、御文に
『円融院御集』	中務に、歌えりてまいらずへきよし仰られたりける、かきてまいらせけるおくに書たりける

『朱雀院御集』 『村上御集』は歌が詠まれた時についての叙述で始まり、『仁和御集』 『冷泉院御集』も歌を詠んだ当時の天皇の身分について述べることで歌の時代を示している。『亭子院御集』 『円融院御集』も同様に歌が詠まれた時と状況に関する叙述しか残されておらず、『延喜御集』以外の御集はいずれも天皇本人については何も触れていない。つまり、『代々御集』所収の他集には、『延喜御集』の冒頭文に見られるような、この御集がどのような天皇のものであるのかを読み手に対して知らせようとする意識が全く感じられない。誰の歌を集めているのか、何の断わりもなく唐突に始まる他の御集にくらべて、『延喜御集』の詞書が極めて異なるスタンスで書かれていることがわかるのである。

(二) 歌物語に近い詞書・左注

6〜8番歌の詞書および左注的文章は連続していて、その様子は歌を間に織り込んだ歌物語を見るようである。

東宮の女御はむまれ給てのち、うちはへ物のけにかくわつらひ給て、えまいりたまはさりければ、つねにこひしうおほしみてしくされて、御身にそひたる人をめしてとはせ給に、いとかなしけに思て

君とたにかけてもいへはおきつなみ

うちいつることに袖そぬれける(6)

と、きこえさせけるを、いとあはれとおほして、けふはかりはなまかてそと、おほせられければ、あけぬとて、いそきまかてければ、つとめて御ふみつかわしける、次に、

またしとてたのめし物をあけくれに

まとはていてし人はうかりき(7)

御返しをぐしてえやつかうまつらさりけむ、かくてかの女御、三年をへておこたり給て後に、朱雀、村上などはむまれ給へるなりけり、その御もゝかのもるを殿上人にいたさせ給へりければ、さけのみなとしけるに伊衡の中將

ひととせにこよひかそふるけふよりは

もよとせまての月かけとみむ(8)

殊に、物の怪に悩まされて参内できない皇后穩子や彼女を慕う醍醐天皇の描写は非常に豊かであるが、歌が詠まれた時期や背景については曖昧で創作された雰囲気強い。

(三) 醍醐天皇以外の人物が主人公となる場面

御乳母の命婦のむすめ、たいふの君とてさふらひける、みうありける人なりければ、つねに歌よみかはさせ給ければ、かなしきことをおもふに、うたの事もわすれてあるに、御はて五月にまかつとて、大輔君

いまはとてみやまをいつるほとよます

いかなるやとになかむとすらむ(26)

大宮の春秋はいつれまされりとおほせられければ、たいふ秋そいとあはれ侍ときこえさせければ、さくらめてたかりけるを、はるは猶わろくやとてたまはせたりければ

ひとしれす秋にこころはよせしかと

花みるときはいつれともなし(27)

26、27の場面には醍醐天皇は登場せず大輔君が中心となつて描かれている。このように、醍醐天皇の御集でありながら天皇以外の人々が主人公になってしまう場面が、『延喜御集』にはいくつも見られる。しかし、他の天皇の御集において、こうした構成が行われることはありえない。他の御集はそれぞれの天皇の御製を集めることを目的とし、他の歌や人物を登場させるにも天皇を介して行うことを旨としている。けれども『延喜御集』には、そうした意識が非常に希薄なのである。『延喜御集』にとつては、乳母や蔵人らの歌も心に残るものならば、重要な構成要素となるのである。それでいて、御集の中心となるのはやはり醍醐天皇なのだ。『延喜御集』には、醍醐天皇を取り巻く人々すべて、いわば醍醐天皇の宮廷そのものを描き出すことによつて天皇その人を造型しようとする意図が根底にあるように思う。

以上のように、全体を見ると『延喜御集』は、醍醐天皇の御製を中心に、天皇の周辺のあちらこちらでやり取りされた歌を取り混ぜて、それらの歌に長大な詞書が付されて物語のように構成されているのである。しかし、歌物語といえる程完成されてはおらず、かといって他の御集のように歌の羅列が続く集とは明らかに違う。いわば、家集と歌物語との中間に位置して、両者の橋渡しの性格を『延喜

御集』は備えているのである。つまり『延喜御集』は歌物語風に編纂された歌集ということなのである。

七 『大鏡』との関連

久曾神氏、橘健二氏が指摘されたように、『大鏡』には『延喜御集』を資料としたと思われる箇所が存在する。その部分を抜き出して御集と比較すると次頁(表2)の通りである。

すなわち『大鏡』第一巻醍醐天皇の条には、皇子(村上天皇か朱雀院)が誕生した折に、醍醐天皇が御五十日の餅を殿上の間に出し、その場に伺候していた伊衡中将と祝いの歌を詠みかわした場面が描かれているのであるが、これは、『延喜御集』の八、九の詞書、歌とほぼ一致している。久曾神氏は『大鏡』所説が全くこの御集によつてゐることが明かである」と説かれており、『大鏡』自体に「御集などみたまふるこそ」とあることから、氏のご指摘は確かであると思われる。さらに、橘健二氏は「『大鏡』と『御集』との関係」『秋田大学学芸学部研究紀要』第十五集(昭40)において、久曾神氏の説に従つて、『大鏡』の「村上か朱雀院かの」という筆致が『延喜御集』に「朱雀、村上などは生まれ給へるなりけり、その御もゝかのもゝ」と記述さ

れているのに拠つたものであると述べられている。また、『大鏡』に「御集などみたまふるこそ、いとなまめかしう、かくやうのかたさへおはしましける」とある箇所については、『延喜御集』の冒頭、「たいこときこえさせ給けるそなまめかしき御門におはしましければ」の記述に対応するものとされている。

次の、『大鏡』第一巻村上天皇の条は皇后穩子についての記述で、穩子が産んだ東宮保明親王の死を悼む大輔君の歌が二首見受けられる。この条の内容、および「いまはとて」の大輔君の歌は『延喜御集』二六とほぼ同じである。また、同様の記事が『大和物語』第五段にも見られるのであるが、それには

先坊の君うせたまひにければ、大輔かぎりなくなし
くのみおほゆるに、きさいの宮、后にたち給日になり
にければ、ゆゝしとてかくしけり。さりければよみて
いだしける、

わびぬればいまはとものおもへども

こゝろに似ぬはなみだなりけり

とあり、「いまはとて」の歌が欠けているのである。従来『大鏡』研究では「いまはとて」の歌は『続古今集』巻

第一卷六十代醍醐天皇

この御時ぞかし、村上か朱雀院かのむまれおはしましたる御五日の餅、殿上にいださせ給へるに、伊衡中将の和歌つかうまつり給へるはとて、おぼゆめる。

ひととせにごよひかぞふるいまよりは

もとせまでの月かけをみるとよむぞ

かし。御かへし、御かどのしおはしましけむかたじけなさま。

いはひつることたまならばもとせの

のちもつきせぬ月をこそそみ御集など

みたまふるこそ、いとなまめかしう、かくやうのかたさへおはしましける。

第一卷六十二代村上天皇

(隠子が) きさきにたち給日は、先方の御事を宮の内にゆゝしがりて申しいづる人もなかりけるに、かの御乳母子に大輔のきみといひける女房の、かくよみていだしける

わびぬればいまはとものをおもへども

ころににぬはなみだなりけり又、御法

事はてゝ、人々まかりいづる日も、かくこそはよまれたりけれ。

いまはとてみやまをいづるほととぎす

いづれのさとなかんとすらん五月のこ

とにはべりけり。げに、いかにとおほゆるふしぶし、すゑのよまてつたふるばかりの事いひをく人、いうに侍かしな。

御返しをくしてえやつかうまつらざりけむ、かくてかの女御、三年をへておこたり給て後に、朱雀、村上などはむまれ給へるなりけり、その御も、かのものゝを殿上人にいたさせ給へりければ、さけのみなとしけるに伊衡の中将

ひととせにごよひかぞふるいまよりは

もとせまでの月かけとみむ

御前、御返

いはひつることたまならばもとせの

のちもつきせぬ月とこそそみ

御乳母の命婦のむすめ、たいふの君とてさふらひける、みうありける人なりければ、つねに歌よみかはさせ給へれば、かなしきことをおもふに、うたの事もわすれてあるに、御はて五月にまかつとて、大輔君

いまはとてみやまをいづるほととぎす

いかなるやとなかむとすらむ

題しらず

延喜皇后宮大輔

今はとてみ山を出づる郭公

いかなる宿に鳴かむとすらむ

を採りあげている。しかし私は橘健二氏が

『大鏡』には「かの御乳母子に大輔のきみ」とあり、『延喜御集』には、「御乳母の命婦のむすめたいふの君」とあるのに注目しなければならない。大輔の君は、先坊文彦太子（保明親王）の乳兄弟であることを明示していること両書全く同じなのである。『大和物語』にも、さらには『統古今集』にも見えない。

大輔の君については、（中略）『大鏡』の裏書によれば、

大輔乳母事文彦太子御乳母

或扶

但馬守源弼女

とあり、諸注すべて前坊の乳母としている。しかるに、この村上天皇紀に見える記事のみ「乳母子」としている。されば『大鏡』の古本系統の三巻本・六巻本、な

いしは異本系統の披開本はすべて「御乳母子」としているが、古活字本及び八巻本の流布本系統は、

かの御乳母子に御めのとゞも

と割注を施して、「御乳母子」について「御めのとゞも」と疑っている。ここにおいて筆者は古活字本系統の存擬を是とし、おそらくは『延喜御集』の詞書によつた『大鏡』作者が、「御乳母の命婦のむすめ」によつて、「御乳母子」と忠実に記述したものであらうと思ふ。

と述べられているのに従いたい。

八 『延喜御集』の成立

前項において『延喜御集』と『大鏡』の関連を示した。『大鏡』が『延喜御集』を典拠としていたと考えると、御集は『大鏡』の成立以前にすでに存在していたことになる。また、久曾神昇氏が指摘された清輔本古今集などの頭注存在からも、平安後期には現在の『延喜御集』に近いものが成立していたとの推定が可能であると思ふ。

同様に『栄花物語』『大和物語』との比較を試みるが、『栄花物語』には御集との関連性が全く見られない。『大

和物語』については前項でも述べた通り、五段において『大鏡』と同じく保明親王の御乳母子大輔君の歌が題材とされているのだが御集所収の歌とは合致せず、別の資料を典拠としたものと思われる。その他の『大和物語』の段においても、醍醐天皇自身や三条右大臣女御、皇后穩子、定方、伊衡など醍醐宮廷の人々が盛んに登場するのだが、『延喜御集』に所収されている彼等の歌や関連性のある記事は全く見受けられないのである。もちろん、単に『大和物語』の作者が『延喜御集』を資料として用いなかっただけである、との可能性も否定できず、この結果だけで御集の成立を『大和物語』の成立以降と判断してしまうことはできない。

しかし、成立時期を探る手がかりを御集内部に求めてみると、『延喜御集』の詞書には醍醐天皇自身に敬語が用いられており、本集が後人の撰によることは明らかである。また、同じく詞書には、御集に登場する醍醐、朱雀、村上天皇をそれぞれ「たいこときこえさせ給ける」「朱雀院の御門」「村上」と、いずれも追号で表記していることから、御集の成立を村上天皇の崩御以降と考えることができる。しかし、これらが後世の訂正である可能性も無視することはできない。

一方、『延喜御集』の成立について久曾神昇氏は「拾遺

集以前に編纂せられたものではないか」と推定されている。

六『延喜御集』の性格において『延喜御集』が歌物語な要素を持った集であることを指摘したが、家集の物語化が盛んであったのは『後撰集』から『拾遺集』にかけてのごく短い時期であったといわれる。『延喜御集』も、この限られた一時期に編纂されたのだろうか。

橋本不美男氏は『王朝和歌史の研究』（笠間書房・昭47）において、村上朝期前後に「自他撰ともに、『業平集』『元良親王集』『時明集』『本院侍従集』『馬内侍集』『一条摂政御集』のような、恋愛贈答を主軸とし、歌物語的構成の家集が成立したことが推定されよう」と述べられている。氏が説いておられる時期にこれまでの考察を併せると、『延喜御集』の成立は村上朝の頃を上限と考えるのが適当であるように思える。

九 おわりに

以上の考察から、『延喜御集』は歌物語的な性質の御集であり、『代々御集』に合綴されている他の天皇の集とは異なった趣を持つということ、そして、村上朝以降の一時に編纂されたであろうことを推測するのである。橋本不美男氏のご指摘の通り、当時は『業平集』『元良親王集』

に代表される歌物語的構成の家集を編纂することが流行していたようである。『延喜御集』の編者は、この流行に則つて醍醐天皇の御製を集成し『代々御集』の中で異彩を放つ御集が誕生したのである。

『延喜御集』は歌数が少なく、内容にしてもそれほど華やかなものであるとは言いがたい。しかし、所収されている歌や詞書には宮廷の人々の歌のやり取りが細やかにしるされ、天皇の身邊での「日常」を伺い知ることができる。あるいは、醍醐天皇という、政治においても、文化においても、当時全ての頂点に立っていた人物（実際には象徴的なものであったとしても）を描く舞台を、あえて「日常」におくことによつて『延喜御集』編者は、人間性に富んだ新しい醍醐天皇像の造型を試みたのではないだろうか。

(こばやし みつよ 東京リーガルマインド金沢本校)